論　文

擦文文化の成立過程と秋田城交易

鈴木琢也

Key Words　末期古墳（Mounded tomb built at the end of the Kofun period）、須恵器（Sue ware）、土師器（Haji ware）、鉄製品（Iron implements）、物流・交易（Trade system）

1　はじめに

７～8世紀の北海道では、続縄文文化が擦文文化に移行していく過程がみられ、石狩低地帯に広がる石狩川水系河川下流域を中心に末期古墳の築造、土器型式・組成の変化、竈を有する竪穴住居の使用など新たな文化的要素がみられる。8～9世紀は、この擦文文化と東北地方土師器文化との物流・交易が活発になる時期でもある。

鈴木（2012）は、この擦文文化の成立過程を明らかにするため、北海道にみられる末期古墳と3～9世紀の土壙墓を比較検討し、8世紀を画期として続縄文文化の土壙墓とは特性の異なる末期古墳が築造される過程を明確にした。また、鈴木（2011a）は、北海道出土の7～9世紀の土器の検討から、8世紀を画期として位置づけ、土器の器種組成様式やその特性が大きく変化することを指摘した。さらに、鈴木（2006c、2010、2011b、2015）は、北海道から出土した本州産の鉄製品や須恵器などを検討し、8～9世紀に擦文文化と東北地方土師器文化との物流・交易が活発化することを明らかにした。

この8世紀を画期とした末期古墳の築造や土器型式・組成の変化、物流・交易の活発化の背景には、続縄文文化集団と東北地方土師器文化集団との直接的な文化接触があり、続縄文文化が擦文文化に移行していく大きな要因になったものと考えられる。しかも、8～9世紀には、擦文文化集団と律令国家集団との出羽国秋田城などを通じた物流・交易が展開していたことがうかがわれる。

ここでは、第一に、8世紀を画期とした北海道の墓制・葬送、土器型式・組成の変化などを総合的に検討し、東北地方土師器文化集団が北海道に移動・往来したことにともなう直接的な文化接触により、続縄文文化が擦文文化に移行していく過程について明らかにする。

第二に、8～9世紀を対象に①秋田（出羽国）から北海道にもたらされた須恵器の物流、②北海道と東北地方北部にみられる横走沈線文系土器と須恵器の供伴関係やその分布、③北海道にもたらされた鉄製品の物流、④史料にみられる渡島蝦夷、渡島狄など北海道地域の人びとと、出羽国秋田城の律令国家集団との交流や交易の記事の検討を行い、北海道の擦文文化集団と律令国家集団との秋田城を通じた物流・交易の実態について考察する。

これらのことから、擦文文化の成立過程とその物流経済的な背景について明らかにするものである。

2　擦文文化の成立過程

北海道では、8世紀を画期として墓制・葬送、土器型式・組成などが大きく変化する。ここでは、この墓制・葬送、土器型式・組成の変化などを総合的に検討し、東北地方土師器文化集団の北海道への移動・往来にともなう擦文文化の成立過程について考察する。

（1）墓制・葬送の変化

北海道では8世紀を画期として、それまでの続縄文文化の土壙墓とは全く特性の異なる末期古墳が築造される。この末期古墳は、江別市後藤遺跡、同町村農場1遺跡、札幌市K39遺跡医学部陽子線研究施設地点、同K39遺跡北区北7条西6丁目地点、恵庭市西島松5遺跡、同柏木東遺跡、千歳市ユカンボシC15遺跡、同ユカンボシC1遺跡など8カ所で確認され、その分布は石狩低地帯の石狩川水系河川下流域に集中している（図1・2）。これらは、東北地方北部の北上川水系流域、太平洋沿岸の馬淵川水系河口域、奥入瀬川水系河口域、三陸沿岸の河川河口域、日本海沿岸の雄物川水系流域、米代川水系流域、岩木川水系流域に分布する末期古墳と同様の特性を有するものであると考えられる（図1、鈴木 2012、2014b）。

鈴木（2012）は、北海道にみられる末期古墳と土壙墓（3～9世紀）の規模、平面形状、墓葬形態の特徴、埋葬法などを比較検討し、末期古墳と土壙墓（3～9世紀）の特性や埋葬法が大きく異なることを指摘した。この概要は、次のとおりである（図2・3、表）。

①3～6世紀の土壙墓は、平面形状が円形・楕円形主体である。配石、袋状ピット、礫の配置、杭状小柱穴、ベンガラが出土するものがみられ、埋葬法は屈葬である

鈴木琢也：北海道博物館　研究部　歴史研究グループ

（表、鈴木 2012）。

②7世紀の土壙墓は、平面形状が隅丸長方形、楕円形主体である。3〜6世紀の土壙墓と同様に袋状ピット、礫の配置、杭状小柱穴がみられ、埋葬法は屈葬である（図3、表）。新しい要素として木槨（木棺）がみられること、袋状ピットが土壙墓の壁面につくられること、埋葬遺体の頭部付近に2個の礫を配置することなどがある。

③8〜9世紀の土壙墓は、平面形状が隅丸長方形主体である。7世紀の土壙墓と同様に袋状ピット、礫の配置、杭状小柱穴、木槨（木棺）がみられ、埋葬法は屈葬である。新しい要素として土壙墓の掘り込みが浅く、低い盛土を有するものがあるなど東北地方北部の末期古墳の影響がみられる（図3、表）。

④8〜9世紀の末期古墳は、埋葬主体部の平面形状が長方形で、長軸が長く、掘り込みが浅い。しかも、墳丘や周溝、「四辺埋め込み式の木槨（木棺）」がみられること、埋葬法が伸展葬になることなど東北地方北部の末期古墳（八戸市丹後平古墳群など）と同様の特性をもつものである（図2・3、表）。

これらのことから、北海道では8世紀を画期として東北地方北部と同様の特性をもつ末期古墳と、続縄文文化の土壙墓の特性に加え末期古墳の特性を受けいれた土壙墓の二系統からなる形態の変容がみられるようになる。しかも、北海道の末期古墳は、3〜7世紀までの続縄文文化の土壙墓と隔絶したものであり、その規模や平面形状、墓葬形態、埋葬法のほぼ全てが東北地方北部の末期古墳と同様の特性をもつものである。このことから、北海道の末期古墳は北海道在地の集団が築造したものではなく、末期古墳を築造する技術をもつ東北地方土師器文化集団が北海道に移動・往来し、築造したものと考えられる。すなわち、東北地方土師器文化集団の北海道への移動・往来にともなう直接的な文化接触が北海道の墓制・葬送に大きな影響を与えたものと考えられる。

(2) 土器型式・組成の変化

北海道では8世紀を画期として、土器の型式とともに

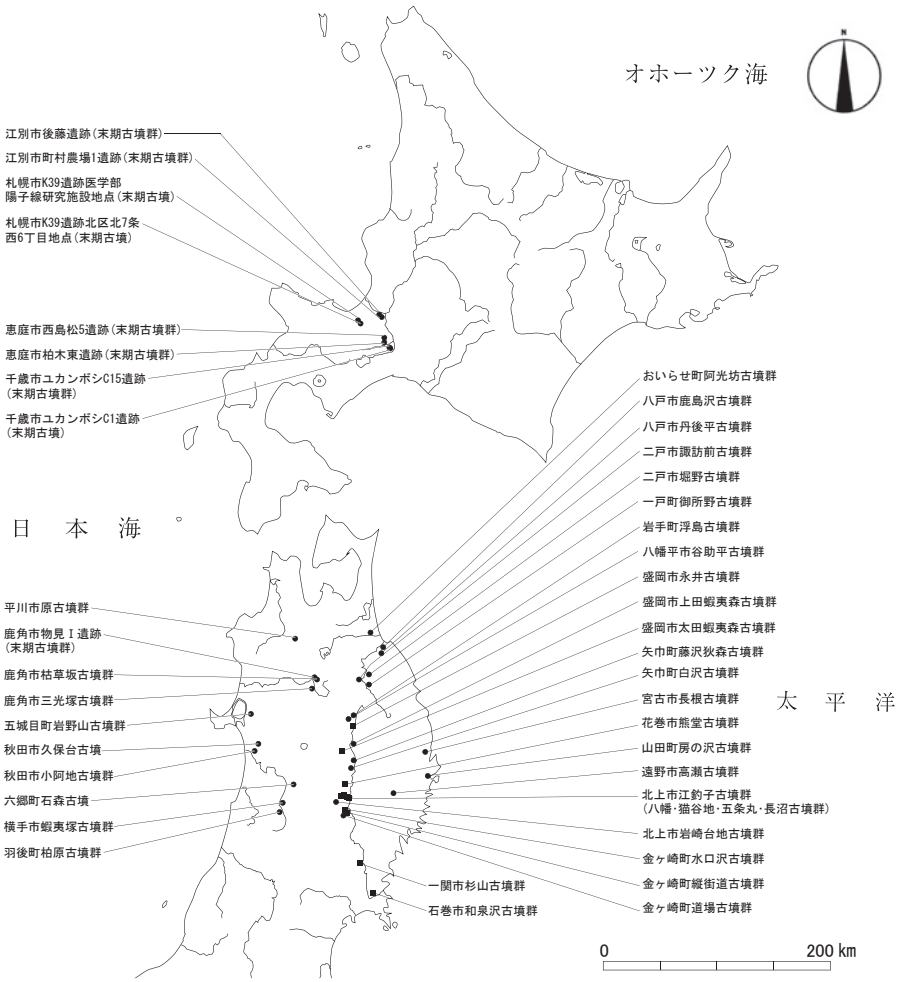

図1　末期古墳の分布
（●：埋葬主体部・土壙タイプ、■：埋葬主体部・積石タイプ）

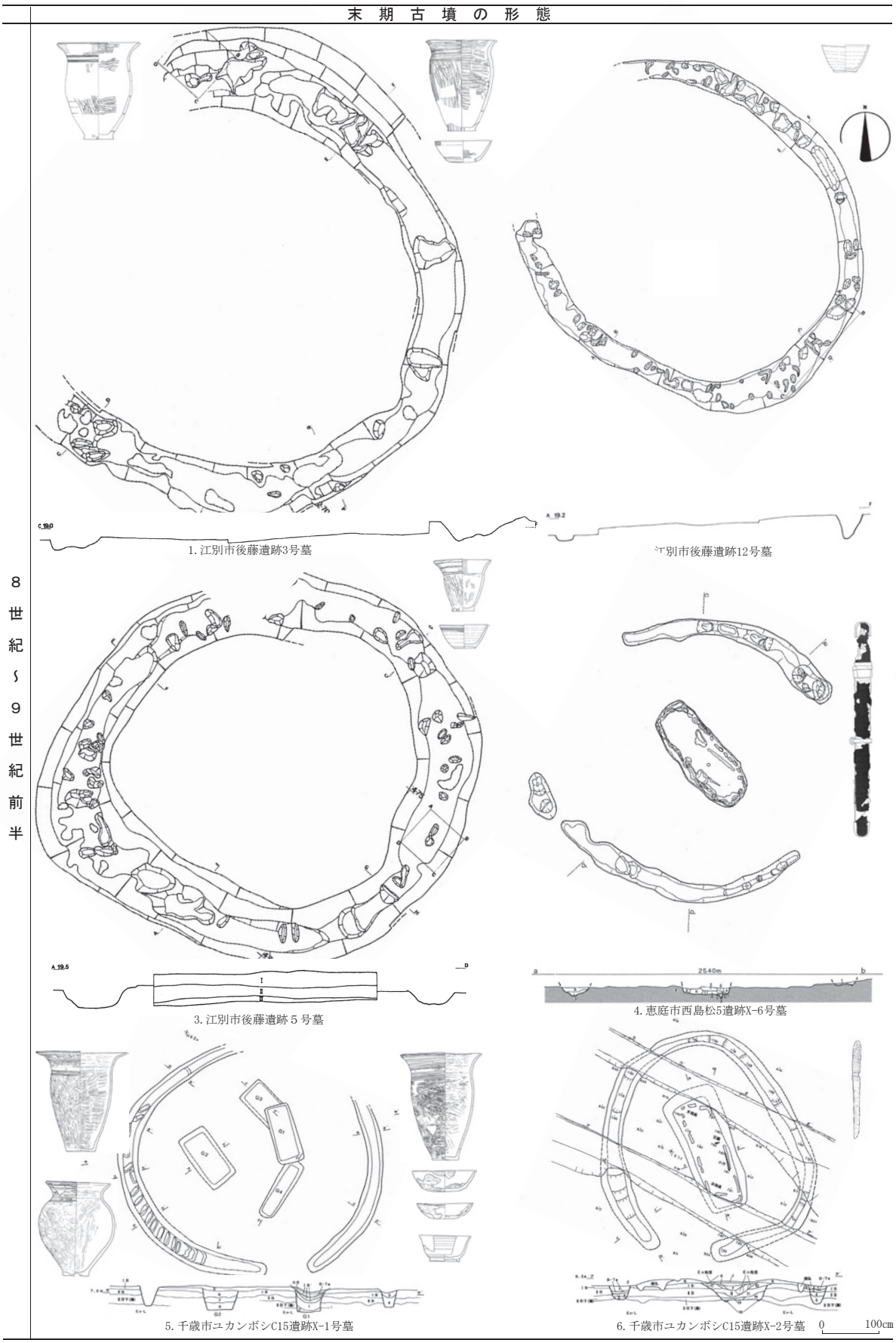
末期古墳の形態
8世紀～9世紀前半
1. 江別市後藤遺跡3号墓
江別市後藤遺跡12号墓
3. 江別市後藤遺跡５号墓
4. 恵庭市西島松5遺跡X-6号墓
5. 千歳市ユカンボシC15遺跡X-1号墓
6. 千歳市ユカンボシC15遺跡X-2号墓
0　100cm

図2　北海道の末期古墳

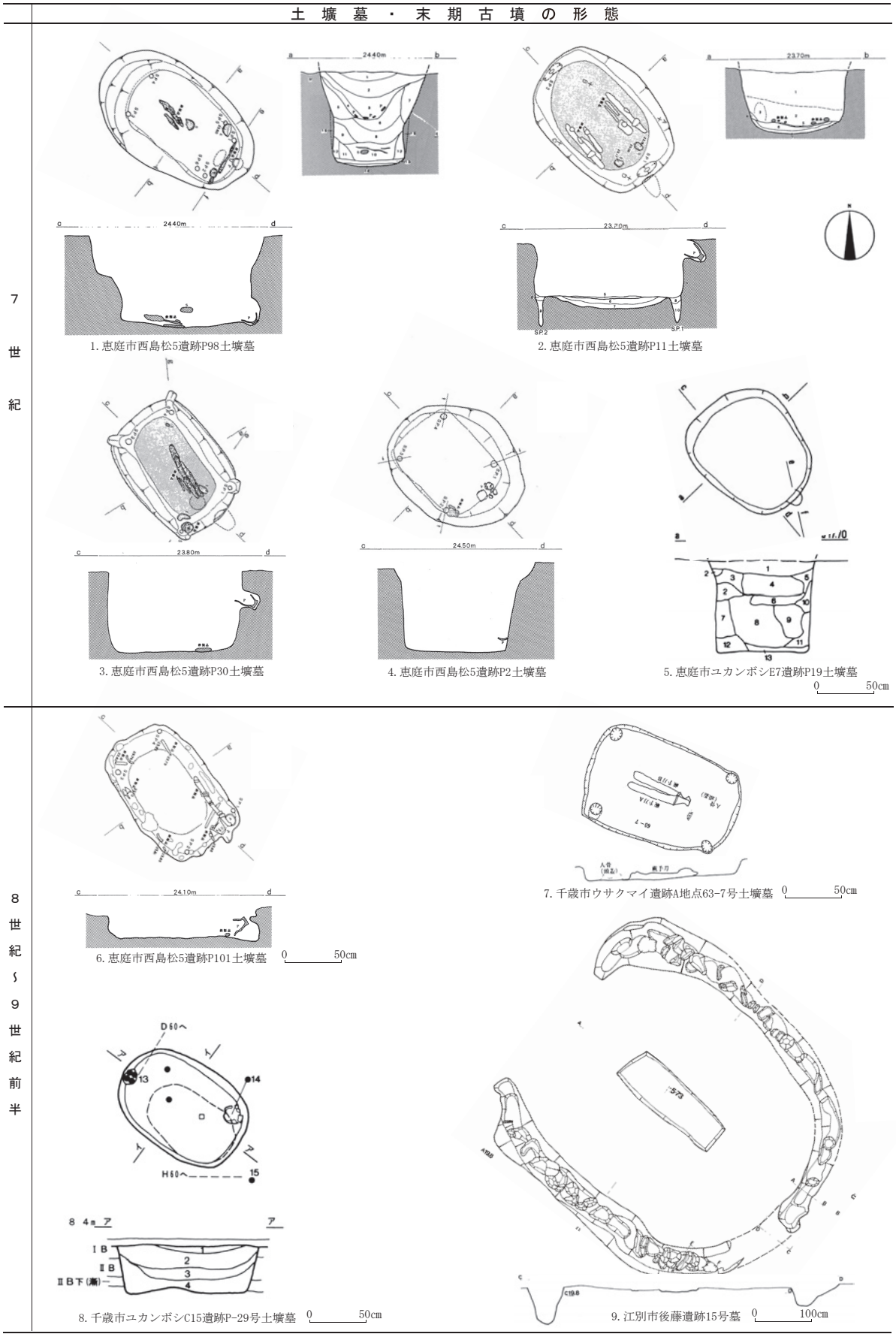

図3　北海道の土壙墓と末期古墳（7～9世紀）

特性の分類 / 土壙墓・末期古墳	円形	楕円形	隅丸長方形	長方形	ベンガラの検出	袋状ピット	配石	礫の配置	杭状小柱穴	木槨(木棺)	墳丘(盛土)	周溝	石敷	埋葬
3〜4世紀の土壙墓														側臥屈葬
5〜6世紀の土壙墓									?					側臥屈葬
7世紀の土壙墓							?							側臥屈葬
8〜9世紀前半の土壙墓														側臥屈葬
8〜9世紀前半の末期古墳														伸展葬
八戸市丹後平古墳群														伸展葬

表　土壙墓・末期古墳埋葬主体部の特性と埋葬（3〜9世紀）

器種組成様式も大きく変化する（図4、鈴木 2011a）。7世紀の土器の器種組成様式は、深鉢形土器、注口形土器、片口形土器、鉢形土器からなり、この器種組成様式は、続縄文文化後半の時期以来、系統的に受け継がれてきたものである（図4）。8世紀の土器の器種組成様式は、長胴甕形土器、球胴甕形土器、甑形土器。鉢形土器、坏形土器、高坏形土器からなり、新たな器種組成様式が北海道に伝わったものである（図4）。8世紀の土器の器種組成様式は、続縄文文化からつづく北海道独自のものではなく、東北地方土師器文化の影響を強く受けて新たに成立したものであり、土器型式も同様に変容する。すなわち、8世紀を画期に新たな土器組成が成立し、土器型式も変容したことを指摘できる。8世紀を画期として、続縄文文化の土器型式・組成が東北地方土師器文化の影響を受けた擦文文化の土器型式・組成へ移行するという大きな変化があったのである。

(3) 集団の移動にともなう文化変容

これまで示してきたように、北海道では8世紀に文化が変容する大きな画期があることを指摘してきた。これらの文化変容は、①北海道に末期古墳と、その影響を受けた土壙墓の二系統からなる墓の形態がみられるようになること、②続縄文文化後半の時期以来、系統的に受け継がれてきた土器組成から注口形土器、片口形土器が消失し、新たに坏形土器、高坏形土器が土器組成に加わり東北地方土師器文化の土器を模倣したものが使用されるようになることなどである。これらの文化変容は、本州文化の影響を受けたものであり、東北地方土師器文化集団の移動･往来による北海道在地集団との接触で成立したものといえる。

墓制･葬送の変化は、続縄文文化集団が北海道に移動･往来した東北地方土師器文化集団の墓制･葬送を受け入れ、擦文文化の墓制･葬送へと移行していく過程を示すものである。土器型式や組成の変化は、続縄文文化集団が、北海道に移動･往来した東北地方土師器文化集団の使用する土器を模倣し、その土器型式や組成を受け入れたことによるものである。この注口形土器、片口形土器の消失により、続縄文文化が終焉し、新たに東北地方の土師器の土器組成からなる擦文文化が成立する。すなわち、8〜9世紀の北海道の土器には、北海道に移動･往来した東北地方土師器文化集団が製作したものと、擦文文化集団がそれらを模倣したものとの二系統の土器があることを指摘できる。

また、この時期には東北地方と同様の竈を有する竪穴住居が石狩低地帯を中心に定着するようになる。このことは、続縄文文化集団が、北海道に移動･往来した東北地方土師器文化集団の竪穴住居を模倣し、その住居形態や竈の使用を受け入れたことによるものと考えられる。しかも、右代（2004、2005）が指摘するように、この時期に北海道石狩低地帯に東北地方土師器文化集団の短期的な集落とされる千歳市丸子山遺跡のような要害遺跡（防御的な集落遺跡）がみられ、東北地方土師器文化集団が北海道に移動･往来したことが裏づけられる。

これらのことから、8世紀には、東北地方土師器文化集団の北海道への移動･往来にともない、続縄文文化の墓制･葬送、土器型式・組成、竪穴住居などが東北地方土師器文化の影響を受けたものに大きく変容し、擦文文化に系統的に受け継がれていく新たな墓制･葬送、土器型式・組成、竪穴住居が出現する。すなわち、この時期は、北海道在地の文化である続縄文文化と東北地方土師器文化との人的、文化的な接触により、東北地方土師器文化の文化的要素が続縄文文化に受け入れられ、擦文文化が成立していく文化変容の画期であると考えられる。

この擦文文化は、墓制・葬送、土器型式・組成、竈を有する竪穴住居などの文化的要素からみると東北地方土師器文化の地方型である「北海道型土師器文化」としてとらえることも可能であろう。

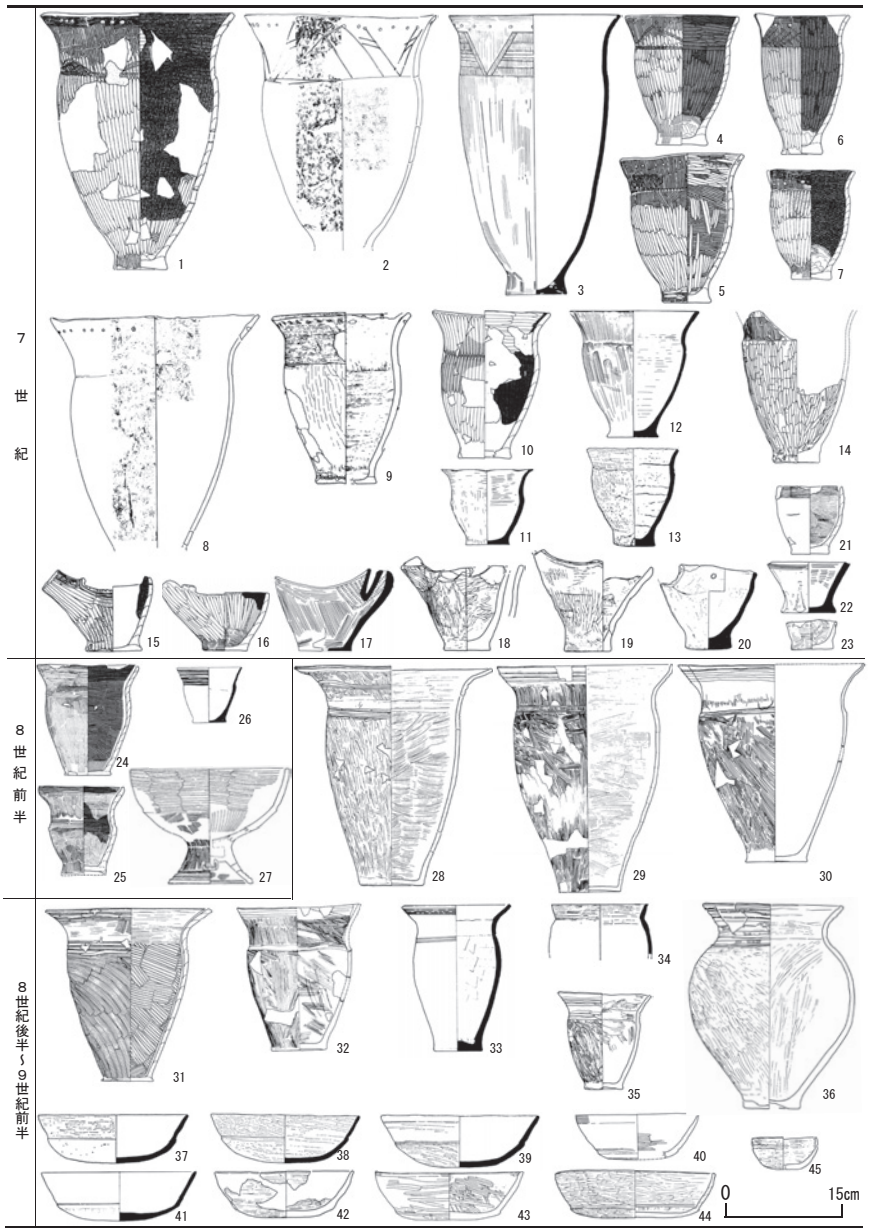

図4　北海道の土壙墓・末期古墳出土の土器（7～9世紀）
(1･4･5･6･7･10･15･16･21･24･25:恵庭市西島松5遺跡、2･8:江別市萩ヶ岡遺跡、3･11･12･17･22:余市町天内山遺跡、9･18･19:恵庭市ユカンボシE7遺跡、13･20･34･37･38･39:千歳市ウサクマイ遺跡A地点、14:小樽市蘭島D遺跡、23･29:千歳市ユカンボシC9遺跡、26･27:恵庭市柏木東遺跡、28･35･36･42･44･45:千歳市ユカンボシC15遺跡、30･32:千歳市ウサクマイ遺跡N地点、31:恵庭市柏木川4遺跡、33･41:恵庭市柏木川1遺跡、40･43:江別市後藤遺跡)

3　擦文文化と律令国家との秋田城交易

８～9世紀は、石狩低地帯の石狩川水系河川下流域が物流･交易の拠点的な地域として地理的に優位性をもち、この地域の擦文文化集団と、律令国家集団との物流･交易が展開していたと考えられる（鈴木 2014c）。

ここでは、①秋田（出羽国）から北海道にもたらされた須恵器の物流、②北海道と東北地方北部にみられる横走沈線文系土器と須恵器の供伴関係やその分布、③北海道にもたらされた鉄製品の物流、④史料にみられる渡島蝦夷、渡島狄など北海道地域の人びとと出羽国秋田城との交流や交易の記事の検討を行い、北海道の擦文文化集団と律令国家集団との出羽国秋田城を通じた物流･交易の実態について考察する。

(1) 須恵器からみた北海道と秋田（出羽国）の物流

北海道で出土した須恵器は、北海道全域の河川河口域・下流域、石狩川水系中流域など約220ヶ所の遺跡で確認され、5世紀後半～10世紀の須恵器が出土している（鈴木 2004）。このうち、5～6世紀の須恵器は、北海道南西部や石狩低地帯の石狩川水系河川下流域などの遺跡から10点ほどが出土しているだけであり、7世紀の須恵器は確認されていない。

北海道で須恵器が本格的に確認される第1段階は8世紀後半～9世紀であり、秋田（出羽国）の秋田市新城窯跡群、同古城廻窯跡群などで生産された須恵器がみられる。その第2段階は10世紀であり、青森県五所川原窯跡群で生産された須恵器が多くみられるようになる。ここでは、第1段階にみられる北海道出土の8世紀後半～9世紀の須恵器について、その分布や特性、生産地を検討し、北海道と秋田（出羽国）との物流について考察する。

1) 北海道における須恵器の分布とその特性（8～9世紀）

北海道における8世紀後半～9世紀の須恵器の分布は、北海道西部の日本海沿岸河川河口域、石狩低地帯の石狩川水系河川下流域に集中し、竪穴住居址や末期古墳から出土する例も多くみられる（図5）。その出土数は、5～7世紀までと比較して飛躍的に増加する。これらの須恵器は底部がヘラ切り底の坏や高台付の坏、蓋、高台付の長頸壷、青海波状あて具痕や螺状沈線がみられる甕などであり、竪穴住居址床面から出土した須恵器の器種別出土数の割合をみると、坏68％、蓋10％、長頸壷3％、中甕19％で、坏の出土数が半数以上を占めている（鈴木 2004、2006a）。

この8世紀後半～9世紀の須恵器には、秋田城周辺の窯跡である秋田市新城窯跡群、同古城廻窯跡群で生産されたと考えられる須恵器（8世紀後半～9世紀前半）が多くみられ、男鹿市（秋田県）の海老沢窯跡群、同西海老沢窯跡群で生産されたと考えられる須恵器（9世紀後半）もみられる（図6、鈴木 2014c）。これらは、北海道石狩低地帯の石狩川水系河川下流域に位置する千歳市ユカンボシC15遺跡（末期古墳）、同美々8遺跡、同末広遺跡、同丸子山遺跡、同オサツ2遺跡、恵庭市中島松6遺跡、同中島松1遺跡、同茂漁4遺跡、同柏木東遺跡（末期古墳）、同島松沢3遺跡、札幌市C504遺跡、同K435遺跡、同K39遺跡、江別市後藤遺跡（末期古墳）などから出土した須恵器である（図5）。これらの須恵器のうち、秋田市新城窯跡群・古城廻窯跡群で生産されたと考えられる須恵器坏を図6-1～26に示した。図6-1～26の須恵器坏は、底部の切り離しが回転ヘラ切りで、切り離し後に粗雑なナデ調整が施されている。底部（内面）には、ナデ調整の痕跡である段がみられ、中央部が瘤状にもりあがるものもみられる。器形は体部下半が湾曲してわずかにふくらみ、口縁部が少しくびれて外反する。また、これら須恵器は灰白色を呈する。これらの特徴などから図6-1～26の須恵器は秋田市新城窯跡群の右馬之丞窯跡（8世紀後半）、谷地Ⅱ遺跡1号窯跡（8世紀後半）、大沢窯跡Ⅰ-1号窯跡（8世紀後半）、谷地Ⅱ遺跡2号窯跡（8世紀末～9世紀前半）、大沢窯跡Ⅱ（9世紀前半）、大沢窯跡Ⅰ-2号窯跡（9世紀前半）、古城廻窯跡群の1・2・3号窯跡（9世紀前半）などで生産されたものと考えられ、その年代は8世紀後半～9世紀前半である（伊藤 1998、2006、東北古代土器研究会編 2008、鈴木 2014c）。

これらの須恵器のうち、千歳市末広遺跡32号住居址から出土した須恵器坏（図6-14）は、口縁部の内側に煤状のものが付着した黒色部がみられるものである。このような須恵器坏は、秋田城跡、払田柵跡などの城柵から出土しており、それらは灯明皿として使用されたものとされている（秋田県教育委員会編 2010）。このことから、千歳市末広遺跡32号住居址の須恵器坏（図6-14）は灯明皿として使用されていたものである可能性が高い。この須恵器坏は、秋田城や払田柵などで灯明皿として使用され、後に北海道にもたらされた可能性があり、秋田城や払田柵などの律令国家集団と、北海道の擦文文化集団との物流・交易や交流を示す資料と考えられる。

男鹿市海老沢窯跡群・西海老沢窯跡群で生産されたと考えられる須恵器高台付坏、須恵器高台付皿を、図6-27

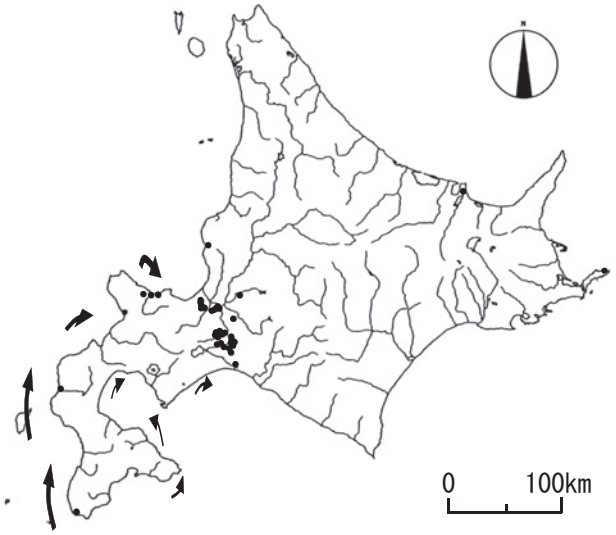

図5　北海道における須恵器の分布（8世紀後半～9世紀）

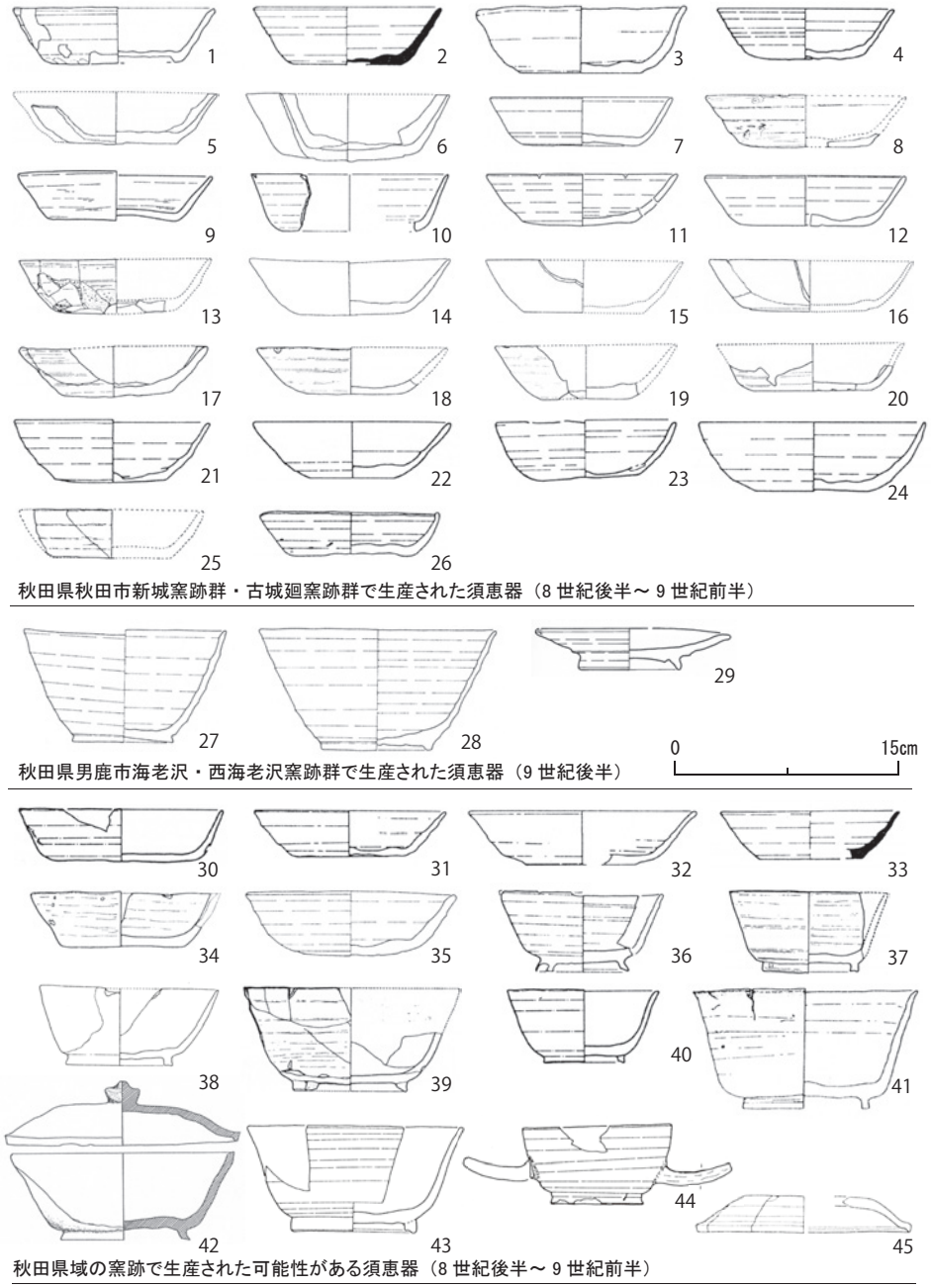

図6　北海道出土の秋田（出羽国）産須恵器（8世紀後半～9世紀）
（1･43･44:千歳市ユカンボシC15遺跡、2～4･21～24･31～33:千歳市美々8遺跡、5･6･13～20･34･37～39:千歳市末広遺跡、7:千歳市丸子山遺跡、8･25:恵庭市中島松6遺跡、9:恵庭市中島松1遺跡、10:恵庭市茂漁4遺跡、11･12:札幌市C504遺跡、26･41:恵庭市柏木東遺跡、27･28･35江別市後藤遺跡、29:根室市トーサムポロ湖周辺竪穴群、30･40:千歳市オサツ2遺跡、36:札幌市K435遺跡、42:恵庭市島松沢3遺跡、45:札幌市K39遺跡）

～29に示した。図6–27･28の須恵器高台付坏は、底部の切り離しがヘラ切り（図6–28）と糸切り（図6–27）のものであり、底部の切り離し後に小さな高台がつけられている。また、器高が高く（深い）特徴的な形状を呈する。これらの特徴などから、図6–27･28の須恵器は男鹿市海老沢窯跡群･西海老沢窯跡群で生産されたものと考えられ、その年代は9世紀後半と考えられる（東北古代土器研究会編 2008）。

北海道東部の根室市トーサムポロ湖周辺竪穴群からは、図6–29（図7–1）の須恵器高台付皿が出土している（(公財）北海道埋蔵文化財センター編 2015）。この須恵器高台付皿は底部の切り離しが糸切りで、底部の切り離し後に器高の1/3ほどを占める大きめの高台がつけられている。その特徴から男鹿市海老沢窯跡群･西海老沢窯跡群で生産されたものと考えられ、その年代は 9世紀後半である（東北古代土器研究会編 2008）。海老沢窯跡群･西海老沢窯跡群では灰釉陶器の高台付皿を模倣したとみられる須恵器高台付皿が多く生産されており、その一つ

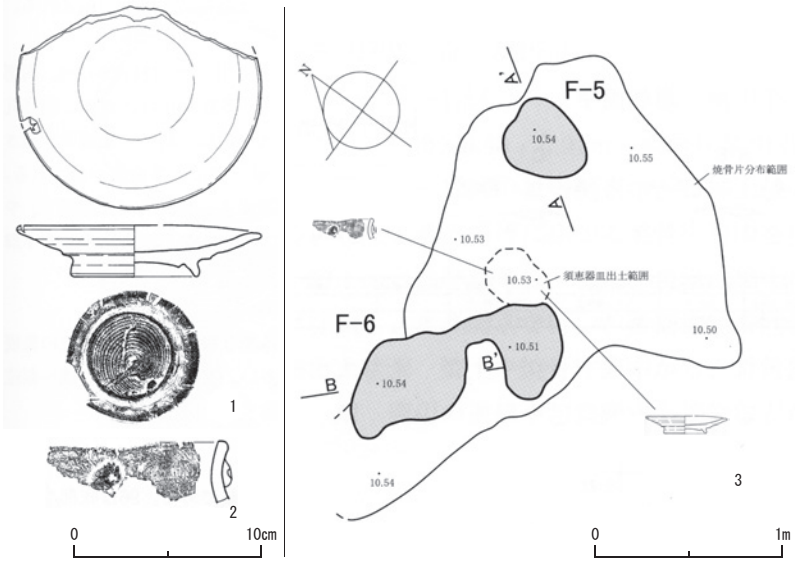

図7　根室市トーサンポロ湖周辺竪穴群出土の須恵器とオホーツク式土器
（1：:焼土F-6出土の須恵器、2：F-6出土のオホーツク式土器3：焼土F-6の遺物出土状況）

が北海道東部の根室市から出土しているのである。

この須恵器高台付皿（図7–1）は、根室市トーサムポロ湖周辺竪穴群の焼土F-6から、貼付文の施されたオホーツク式土器（図7–2）と供伴して出土している（図7–3）。このことから、須恵器高台付皿は、秋田（出羽国）から北海道東部のオホーツク文化集団にもたらされたものである。また、9世紀後半の須恵器高台付皿（図7–1）と、このオホーツク式土器（図7–2）の年代は符合するものである。右代（1991）は、オホーツク式土器編年のなかで、貼付文が施されたオホーツク式土器群をⅡ期のⅡ-b土器群、Ⅱ-c土器群に分類し 、Ⅱ-b土器群を8世紀、Ⅱ-c土器群を9世紀に位置づけている。これらのことから、図7–2の貼付文が施されたオホーツク式土器の年代は、9世紀後半に位置づけられる。

さらに、根室市トーサムポロ湖周辺竪穴群では、9世紀ころの擦文土器も出土している。（公財）北海道埋蔵文化財センター編（2015）によると、この擦文土器と貼付文が施されたオホーツク式土器の平面分布範囲はほぼ同じで、同一層位に両方の土器が混在している状況がみられ、明確な供伴ではないが擦文土器とオホーツク式土器が同じ時期のものである可能性が高いとされている。

根室市トーサムポロ湖周辺竪穴群は、オホーツク文化の集落遺跡であり、そこから秋田（出羽国）産の須恵器高台付皿と擦文土器が出土している。すなわち、9世紀には、オホーツク文化集団が、秋田（出羽国）の律令国家集団あるいは、その勢力下の東北地方土師器文化集団と交流や物流･交易を展開していたことがうかがわれ、擦文文化集団とも交流をもっていたと考えられる。

その他、秋田（出羽国）の窯で生産された可能性がある須恵器については、図6–30～45に示した。これらの須恵器は、秋田市新城窯跡群･古城廻窯跡群あるいは横手市中山丘陵の窯跡群など秋田（出羽国）の窯で生産された可能性が高いと考えられるものであり、今後の課題とする。

2）北海道と秋田（出羽国）との物流

８世紀後半～9世紀の須恵器の分布は、北海道石狩低地帯の遺跡に集中する一方、本州との中間に位置する北海道南西部での出土は希薄である。しかしながら、この時期の須恵器が北海道南西部日本海沿岸域の松前町館浜、せたな町南川2遺跡、北海道西部日本海沿岸域の泊村ヘロカルウス遺跡、余市町沢町遺跡、同大川遺跡などから出土している。したがって、これらの地域を中継点として北海道沿岸の「日本海ルート」により石狩低地帯に須恵器がもたらされたと推定できる（図5・6、鈴木 2009、2014c）。

さらに、東北地方との物流ルートを検討すると、北海道の遺跡から出土する須恵器は、先に示したように秋田（出羽国）の窯で生産されたものが多いことから、北海道石狩低地帯の擦文文化集団と、秋田（出羽国）の律令国家集団あるいは、その勢力下の東北地方土師器文化集団との「日本海ルート」による物流･交易が展開していたと考えられる。北海道石狩低地帯の末広遺跡では、秋田市新城窯跡群で生産されたと考えられる須恵器がまとまって出土し、他地域産の須恵器が混在している状況がみられない。これらの須恵器は、ある程度まとまった状態で、秋田（出羽国）から直接的に北海道にもたらされたものと考えられる。しかも、近年の調査によると北海

道と秋田（出羽国）の中間に位置する青森県日本海沿岸域の五所川原市十三湊遺跡や中泊町折戸遺跡などで秋田（出羽国）産と考えられる須恵器が出土していることも「日本海ルート」による物流・交易が展開していた裏づけとなる。すなわち、これら青森県日本海沿岸域を中継点として、「日本海ルート」が成立し、北海道石狩低地帯に秋田（出羽国）産の須恵器がもたらされたと考えられる。

また、北海道東部のオホーツク文化集団も秋田（出羽国）の律令国家集団あるいは、その勢力下の東北地方土師器文化集団と交流や物流・交易を展開していたと考えられ、この交流や物流・交易に擦文文化集団が関わっていた可能性がある。

次に、北海道から出土した須恵器の器種構成についてみていくと、8世紀後半～9世紀の須恵器は、坏が全体の68％と半数以上を占めている（鈴木 2006a）。須恵器の坏は、壷・甕類のように液体などを入れて運ぶ容器に適した器種ではないことから、容器として北海道にもたらされたものではないと考えられる。したがって、これらの須恵器の坏は、史料の検討から後述するように秋田城などでの朝貢や饗給などにともない律令国家集団から北海道の擦文文化集団にもたらされた可能性が高いものと考えられる。また、先に示した東北地方土師器文化集団の移動・往来にともない北海道にもたらされた可能性もある。

一方、北海道から出土した10世紀の須恵器の器種構成は、長頸壷と中甕が全体の87％占め、器種がそれらにほぼ限定されていく（鈴木 2006a）。 鈴木（2006a）は、この長頸壷が「酒」などの液体を入れる容器に利用され北海道にもたらされたものであり、中甕は船（交易船）の水甕およびバラストとして利用されたものの一部が北海道に残されたものであることを指摘した。この10世紀の須恵器壷・甕は青森県五所川原窯で生産されたものが多くみられ、擦文文化集団と青森（津軽）を中心とした地域の東北地方土師器文化集団との物流・交易にともない北海道にもたらされたと考えられる。

すなわち、北海道から出土する須恵器の器種構成の変化は、北海道と本州の物流・交易システムの変化を示すものである。8世紀後半～9世紀は、擦文文化集団と秋田（出羽国）の律令国家集団との朝貢や饗給にともなう物流・交易が主要なものであり、10世紀には、擦文文化集団と青森（津軽）を中心とした地域の東北地方土師器文化集団との物流・交易へと移行していくのである。

(2) 横走沈線文系土器と須恵器からみた交流

ここでは、北海道と東北地方北部から出土した横走沈線文系土器について須恵器との供伴関係や、その分布の拡がりを示し、擦文文化集団と東北地方土師器文化集団、律令国家集団の交流の状況や交流のルートを検討する。

1）横走沈線文系土器

横走沈線文系土器は、口縁部から頸部にかけて横走沈線文を施した長胴甕形の土器であり、8～9世紀の年代に位置づけられるものである（図8・9）。このような土器が北海道から東北地方北部に広く分布し、北海道では擦文土器あるいは土師器、東北地方北部では土師器に分類されている。

鈴木（2006b）は、北海道から出土する横走沈線文系土器を長胴甕形土器Ⅰ類、長胴甕形土器Ⅱ-A類に分類した。長胴甕形土器Ⅰ類は、口縁部と頸部に分かれて数条の横走沈線文を施し、その間は無文となるものである（図8–1・2・9～12）。長胴甕形土器Ⅱ－A類は、口縁部から頸部にかけて、多条の横走沈線文を施したものである（図8–15～17）。鈴木（2006b、2011a）は、これらの土器と須恵器・鉄製品の供伴関係をもとに長胴甕形土器Ⅰ類を8世紀～9世紀前半、長胴甕形土器Ⅱ－A類を9世紀の年代に位置づけている。この長胴甕形土器Ⅰ類、長胴甕形土器Ⅱ-A類と同様の土器が東北地方北部からも出土し、横走沈線文土器（図8–28・31）、多条横走沈線文土器（図8–22・30・32）として分類されている（高橋 1998、宇部 2007、斉藤　2008）。横走沈線文土器は長胴甕形土器Ⅰ類と同様の土器であり、多条横走沈線文土器は長胴甕形土器Ⅱ-A類と同様の土器である。ここでは、横走沈線文土器、多条横走沈線文土器の用語を使用し検討を進めることとする。

2）横走沈線文系土器と須恵器の供伴関係とその分布

北海道石狩低地帯の石狩川水系河川下流域の竪穴住居址では、横走沈線文土器（図8–9～12）と秋田（出羽国）産の須恵器（図8–13・14）が供伴して出土し、多条横走沈線文土器（図8–15～18）と秋田（出羽国）の窯で生産された可能性が高い須恵器（図8–19～21）が供伴して出土している。さらに、秋田市秋田城跡1096号住居址、同大平遺跡1号住居址などでは、横走沈線文土器や多条横走沈線文土器（図8–22・28）と、秋田（出羽国）産の須恵器（図8–24～27・29）が供伴して出土している。

しかも、多条横走沈線文土器の分布は、青森県日本海沿岸の岩木川水系下流～中流域（五所川原市藤枝遺跡、弘前市中野遺跡、平川市李平遺跡、同原古墳群、同李平下安原遺跡、同五輪野遺跡、浅井（1）遺跡）、同日本海沿岸の河川河口域（五所川原市中島遺跡、鰺ヶ沢町舞戸遺跡、深浦町西浜折曽の関遺跡）、同陸奥湾沿岸の河川河口域（青森市沢田遺跡）、同下北半島の河川河口域（大間町小奥戸遺跡、東通村大平（4）遺跡）にみられ、北海道日本海沿岸の河川河口域（せたな町南川2遺跡、

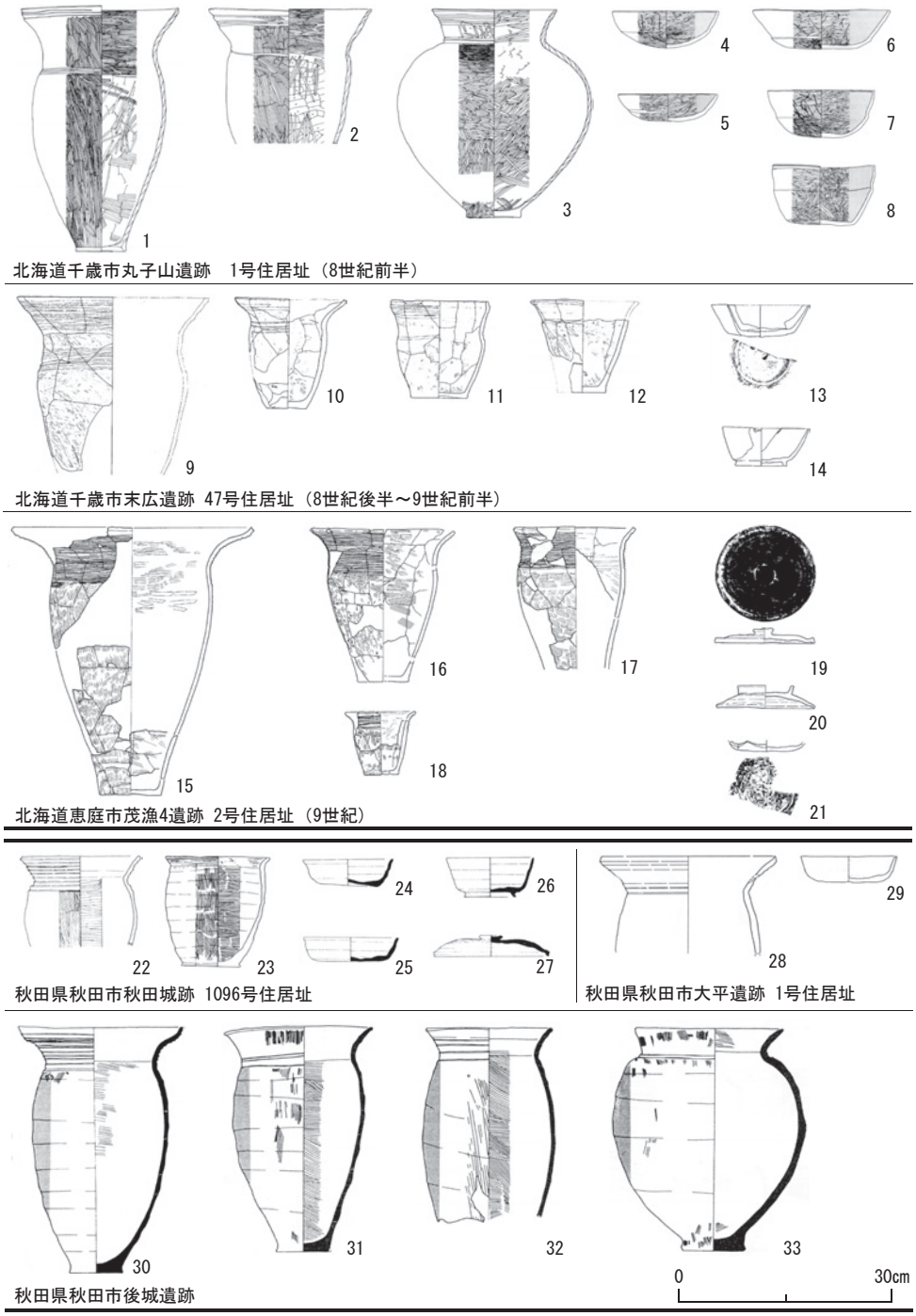

図8　北海道・秋田県出土の横走沈線文系土器と須恵器

余市町沢町遺跡など）にもみられる（図9）。すなわち、多条横走沈線文土器と須恵器の供伴関係やその分布から、8世紀後半～9世紀には、多条横走沈線文土器を使用する地域集団が、秋田（出羽国）の律令国家集団との交流や物流に関わっていた可能性があり、秋田（出羽国）から青森の日本海沿岸域を経由し、北海道石狩低地帯に至る「日本海ルート」による物流・交易や交流を担っていたと考えられる。

一方、横走沈線文土器については、青森県太平洋沿岸の馬渕川・新田川水系下流～中流域（八戸市根城跡、同田面木遺跡、同櫛引遺跡、同見立山2遺跡など）に多くみられる。宇部（2007）によると、馬渕川・新田川水系下流～中流域の横走沈線文土器は7世紀後葉～8世紀前葉頃からみられるとされている。また、鈴木（2006b、2011a）は、北海道石狩低地帯の横走沈線文土器を8世紀～9世紀前半の年代に位置づけている。したがって、8世紀前半の段階には、北海道石狩低地帯と青森県太平洋沿岸の馬渕川・新田川水系下流～中流域に同様の土器

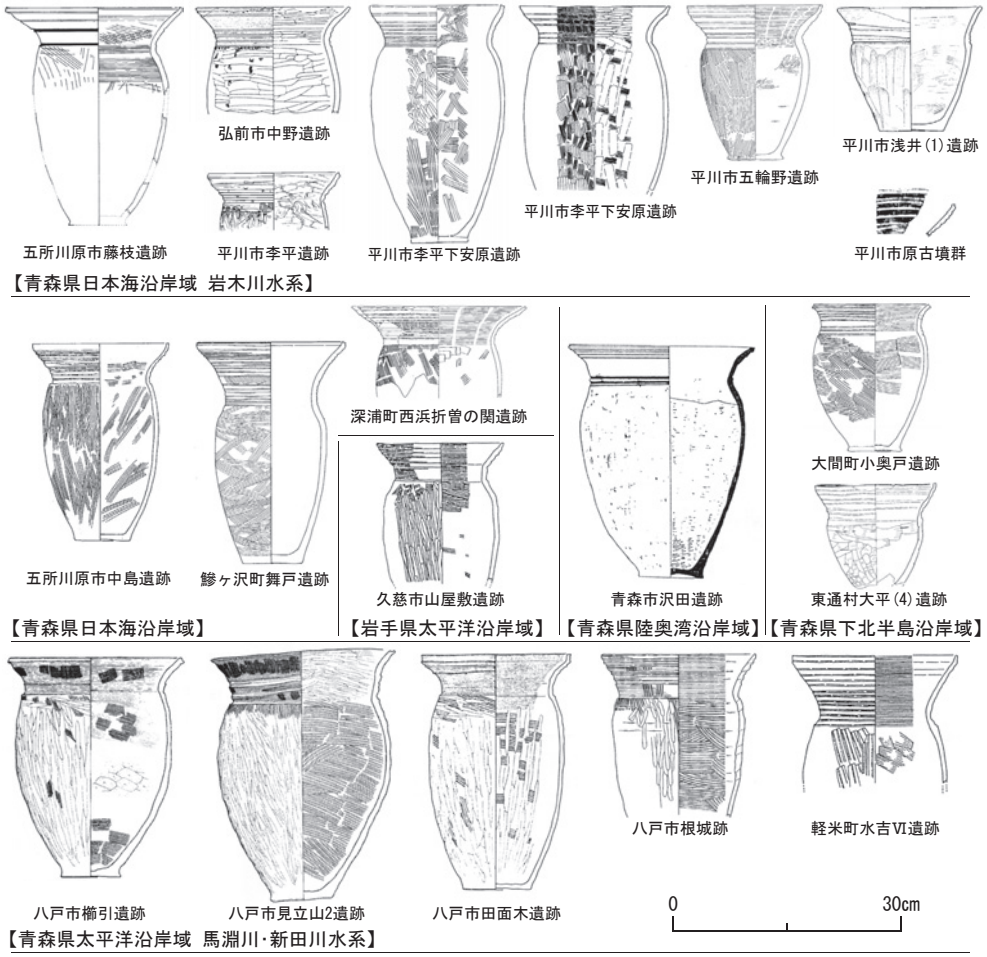

図9　青森県・岩手県出土の横走沈線文系土器

を使用する地域集団が存在し、地域間の交流が展開していた可能性がある。

(3) 鉄製品の物流

考古学的にみると、8〜9世紀に本州から北海道へもたらされた主要な交易品として鉄製品があげられる。これらは先に示した須恵器とともに、北海道の擦文文化集団にもたらされた可能性がある。この鉄製品の北海道における時空分布とその特性を示し、物流の様相を検討する。

8〜9世紀の鉄製品の分布は、北海道西部の日本海沿岸河川河口域、石狩低地帯の石狩川水系河川下流域に集中し、その種類も刀子、斧、鋤・鍬、鎌、釘、はずみ車など実用的な生活用具類のほか武具類など多様なものが流入している（図10、鈴木 2005）。さらに、本州産の蕨手刀が北海道石狩低地帯の擦文文化の遺跡と、北海道北東部のオホーツク文化の遺跡から出土している（図10・11、八木 2010、鈴木 2014b）。

8〜9世紀は、鉄製品や蕨手刀の分布が石狩低地帯の遺跡を中心に集中する一方、本州との中間に位置する北海道南西部での出土は希薄である。しかしながら、蕨手刀が北海道南西部日本海沿岸域のせたな町南川2遺跡や、北海道南西部太平洋沿岸域の森町鳥崎川右岸遺跡から出土している（図10・11）。したがって、これらの地域を中継点として北海道沿岸の「日本海ルート」あるいは一部「太平洋ルート」により石狩低地帯に鉄製品や蕨手刀がもたらされたことが推定できる。また、蕨手刀は北海道北東部のオホーツク文化の遺跡にもみられ、「日本海〜オホーツク海ルート」によりオホーツク文化集団に蕨手刀がもたらされたと考えられる（図10・11）。さらに、東北地方との物流ルートを検討すると、先に示したように北海道で出土する須恵器は秋田（出羽国）の窯で生産されたものが多いことから、鉄製品や蕨手刀についても須恵器と同様に秋田（出羽国）を主体とする地域から「日本海ルート」により北海道石狩低地帯にもたらされた可能性が高いことが指摘できる。

一方、八木（2010）は、東北地方北部の蕨手刀の分布が太平洋沿岸河川流域や北上川水系河川流域を中心にみられることから、それらの地域から「太平洋ルート」により北海道石狩低地帯に蕨手刀がもたらされたとしている。

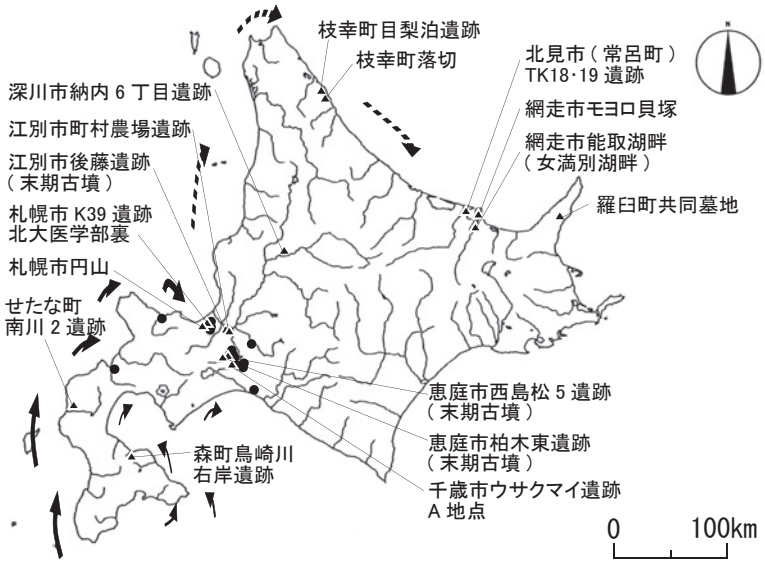

図10　北海道における鉄製品・蕨手刀の分布
（●：住居址出土の鉄製品、▲：蕨手刀、遺跡名記載）

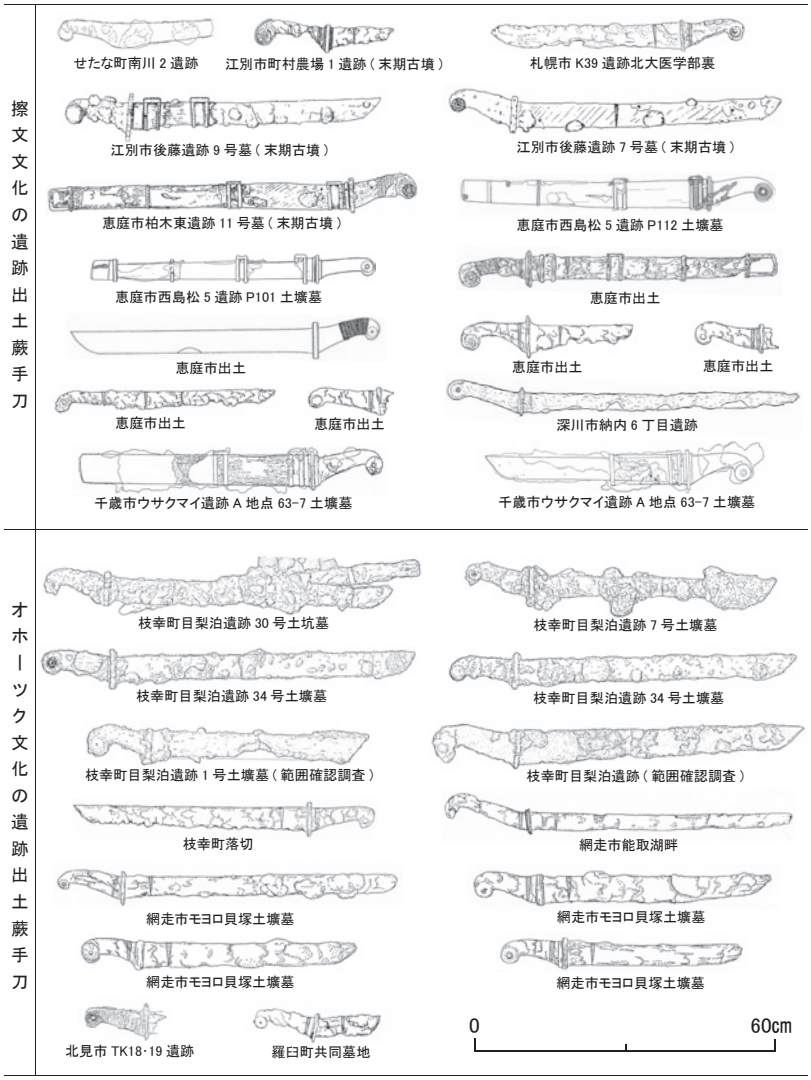

図11　北海道出土の蕨手刀

しかしながら、鈴木（2005、2011b、2014a）は、五所川原産須恵器や鉄製品、銅鋺の分布、擦文文化の遺跡分布などの検討から「太平洋ルート」による物流・交易が活発化するのは10世紀以降であることを指摘している。このことから、8〜9世紀には、「太平洋ルート」による物流・交易が成立する萌芽はみられるものの主要な交易ルートではなかったとすることができる。

（4）史料からみた北海道と出羽国秋田城との物流・交流

ここでは、古代の史料の検討から8〜9世紀に北海道から本州へ入った交易品を推定し、渡島蝦夷、渡島狄などと呼ばれた北海道地域の人びとと、出羽国や秋田城との物流・交流について検討する。

1）北海道から本州への交易品

『続日本紀』、『延喜式』などの史料には、渡島蝦夷、渡島狄、粛慎など北海道地域の人びとの交易・貢納品や奥羽両国の「交易雑物」として扱われた北海道の産物が記されている。また、10世紀以降になると貴族の日記や有職故実書などを通じて、この時代の北海道から本州へ入った産物を知ることができる。鈴木（2005、2006a、2011b）は、これらの古代の史料などを検討し、7〜12世紀の北海道から本州への交易品として羆皮、葦鹿皮、独犴皮、索昆布・細昆布、水豹皮、鷲羽（粛慎羽）、奥州貂裘などの物流・交易の状況を示してきた。

このなかで、8〜9世紀において本州への交易品と考えられる産物は、羆皮、葦鹿皮、独犴皮、索昆布・細昆布である。葦鹿皮、独犴皮、索昆布・細昆布は、『延喜式』（民部下・交易雑物条）に陸奥・出羽両国の「交易雑物」として記載され、北海道産の交易品であった可能性が高い。さらに『類聚三代格』（巻十九・禁制事所収の延暦二一年六月二四日太政官符）では、王臣諸家が渡嶋狄と私的に毛皮を交易することが禁止されている。また、『延喜式』（巻四十一弾正台）によると、羆皮は障泥（馬具）として使用され、五位以上の官人が使用するものとして位置づけられ、『続日本紀』（霊亀元年九月一日条）によると、六位以下の官人が鞍や横刀の飾りに羆皮を用いることが禁止されている。

このことから、8〜9世紀において北海道産の毛皮類は王臣家による私的交易の対象にもなっており、北海道から本州への主要な交易品であったことがうかがわれる。さらに、これらの毛皮類は都で官位によりその使用が定められ貴族の身分標識として珍重されていたこともわかる。これら北海道産の毛皮類は、北海道にもたらされた本州産の鉄製品や須恵器などの対価として本州側に提供された一部の産物と考えられる。

2）北海道と出羽国秋田城の物流・交流とその様相

８世紀後半〜9世紀は、先に示した須恵器の物流の様相などから、北海道石狩低地帯と秋田（出羽国）との「日本海ルート」による物流・交易が展開していた。このことは、史料からも裏づけられる。次に示す8世紀後半〜9世紀の史料①〜⑦の記事によると、渡島蝦夷、渡島狄など北海道地域の人びとと、出羽国や秋田城との関係がうかがわれる。

史料①〜④は、出羽国の国司が渡島蝦夷、渡島狄を饗応し、恩賞を与えたことを示した記事である。①は、鎮狄将軍・出羽国司に渡嶋蝦夷を饗応する際には、よく教え諭すよう命じた記事である。②は、出羽国司に対して、津軽・渡嶋の俘囚には状況を見極めて対処すべきこと、大規模な饗宴を行うのではなく戦功のあった蝦夷に恩賞を与えることなどを指示した記事である。③は、出羽国が征夷軍に従った渡嶋蝦夷と津軽俘囚を慰労したことを報告する記事であり、この時、渡嶋夷の首長103人が同族3000人を率い秋田城に詣で服属したとされている。④は、元慶の乱の際に無許可で不動穀を支出して、渡嶋狄らを饗応した出羽国司の責任を免除する記事である。これらの史料によると、渡島蝦夷や渡島狄と、出羽国秋田城との間に饗給や朝貢などにともなう往来や交流があったことがわかる。さらに、渡島蝦夷や渡島狄が出羽国秋田城を訪れ、国司等（律令国家の官人）の主催のもとに饗応されている状況がうかがわれる。

①『続日本紀』宝亀十一年五月十一日条（780年）

出羽國に勅して曰く、「渡嶋の蝦狄、早く丹心を効し、来朝して貢献すること、日と為りて稍久し。方に今、帰俘逆をなし、辺民を侵し擾す。宜しく将軍、國司、賜饗の日、意を存して慰喩すべし」と。

②『日本三代実録』元慶二年九月五日条（878年）

五日丁酉、出羽国司に勅符して曰く、（中略）且つ津軽・渡嶋の俘囚らの請うところのこと、夷を以て夷を撃つは、古の上計なり。但し野心馴れ難く、動静変わり易し。たまたま他意を生ぜらば、後の恐れ制し難し。宜しく事勢を量りて便に随いて進止すべし。狄俘を饗会するに至っては、事の急にあらざるものなり。もし弥く賊徒を尽くして、労賜するも晩からず。今城を挙げて焼亡して、会聚するに処なし。但し有功の者を抜きて、其れに賞賜を加うれば、以て戎士を勧厲するに足らん。何ぞ必ず大饗して、更に騒動を致さんや。（後略）

③『日本三代実録』元慶三年正月十一日条（879年）

この日、出羽国飛駅して奏して言す、（中略）また渡嶋の夷の首百三人、種類三千人を率いて、秋田城に詣で、

津軽の俘囚の賊に連ならざる者百余人と、同じく共に聖化に帰慕す。若し労賜せざれば、恐るらくは怨恨を生ぜん。これによって従五位下行権介藤原朝臣統行・従五位下行権掾文室真人有房、および令望・滋実・貞額等を遣わして労饗せしむ」と。

④『日本三代実録』元慶五年八月十四日条（881年）
十四日庚寅、これより先、出羽国司言す、「去る元慶元年穀稼多く損し、調庸備わらず。二年夷虜反叛して、国内騒擾す。義従の俘囚及び諸郡の田夷、并びに渡嶋の狄等、或は儆戎に疲れ、或は化を慕いて遠く来る。不動穀三千二百卅七斛五斗を開用して、以て大饗に充つ。先に言上せざること、責は牧宰にあり」と。ここに至って、勅して免除す。

史料⑤は、出羽国で王臣諸家が渡嶋狄と私的に毛皮などを交易することを禁止した記事である。これは、私的交易の禁止令がだされるほど、北海道産の毛皮類の需要があったことを示すものである。出羽国では、律令国家の官人層はもとより都の王臣諸家の使者などと、渡島狄との交易が活発に行われていたことがわかる。

⑤『類聚三代格』巻十九、禁制事、延暦二十一年六月二十四日太政官符（802年）
太政官符す
私に狄の土物を交易することを禁断するの事
右、右大臣の宣を被るに偁く、渡嶋狄等来朝の日、貢ぐところの方物、例として雑皮を以てす。而るに王臣諸家、競いて好き皮を買い、残るところの悪しき物を以て官に進めんと擬る。仍て先に符を下して禁制することすでに久し。而るに出羽国司、寛縦にして曾て遵奉せず。吏たるの道、豈にかくの如かるべけんや。自今以後、厳かに禁断を加えよ。如しこの制に違わば、必ず重科に処せん。事は勅語に縁る。重ねて犯すことを得ざれ。

史料⑥〜⑦は、出羽国と渡嶋狄との争いや戦闘などに関連した記事である。⑥は、渡嶋狄が八十艘の水軍で秋田郡・飽海郡を襲ったため、出羽国司に追討を命じた記事である。⑦は、出羽国の渡嶋狄と奥地の俘囚との戦闘に備えて、出羽国司に城塞の警備を命じる記事である。これらの史料によると、渡嶋狄が出羽国の軍と戦闘したり、共同して奥地の俘囚と戦うなど、渡嶋狄が争いや戦闘に関係して出羽国に往来していたことがわかる。

⑥『日本三代実録』貞観十七年十一月十六日条（875年）
十六日乙未、出羽国言す、「渡嶋の荒狄反叛して、水軍八十艘にて、秋田・飽海両郡の百姓廿一人を殺略す」と。勅して牧宰をしてこれを討ち平げしむ。

⑦『日本紀略』寛平五年閏五月十五日条（893年）
十五日壬午、出羽国渡嶋の狄と奥地俘囚等と戦闘を致さんと欲するの奏状により、国宰に仰せて城塞を警固し、軍士を選練せしむ。

史料⑧は、渡島狄と陸奥国の関係を示した記事である。この史料は、陸奥国気仙郡に来着した渡島狄に来春までの滞在を許し、衣食を支給する記事であり、9世紀に渡島狄が東北地方の太平洋沿岸地域に往来していたことを示すものとされている。

⑧『日本後紀』弘仁元年十月二十七日条（810年）
陸奥国言す、「渡嶋狄二百余人、部下の気仙郡に来着す。当（陸奥）国の管するところにあらずして、これを帰り去らしむ。狄等云わく、『時はこれ寒節にして、海路越え難し。願わくは来春を候ちて、本郷に帰らんと欲す』」てえれば、これを許す。留住の間、宜しく衣粮を給うべし。

これらの史料①〜⑦は、8世紀後半〜9世紀に渡島蝦夷、渡島狄など北海道地域の人びとと、出羽国秋田城の律令国家集団との間に饗給や朝貢にともなう往来や交流、時には争いがあり、交易が活発に行われていたことを示すものである。

一方、渡島狄と陸奥国（東北地方太平洋沿岸地域）との往来や交流を示した記事は、史料⑧のみであり、出羽国秋田城と関連した記事が多くみられる。これらの史料が編纂された時点で、渡島蝦夷、渡島狄と出羽国秋田城の律令国家集団との往来や交流、交易等に関わる記事だけが選択された可能性を考慮しても、出羽国秋田城との関係を示す記事が多くみられることは事実である。さらに、史料⑧には、渡嶋は陸奥国の管轄ではないという記事がみられ、渡嶋が陸奥国の管轄ではなく、出羽国の管轄であったことがうかがわれる。

すなわち、これらの史料と、先に示した須恵器や鉄製品などの物流の状況とをあわせて検討すると、北海道の擦文文化集団が「日本海ルート」を通じて、出羽国秋田城の律令国家集団と朝貢や饗給などにともなう交易や交流を行っていた状況が推定できる。先に示したように8〜9世紀の北海道から本州側への主要な交易品は毛皮類であり、この毛皮類と本州産の鉄製品・須恵器との交易が北海道の擦文文化集団と出羽国秋田城の律令国家集団との間で展開していたものと考えられる。

また、史料①〜⑤には、渡島蝦夷、渡島狄が出羽国秋田城を訪れて朝貢し饗応を受ける、あるいは交易を行う

記事だけがみられる。これは、渡島蝦夷、渡島狄が律令国家に朝貢してくるということを強調する政治的な意図のもとに記録として残された可能性が高い。したがって、史料の記録には残されていないが、同じくらいの頻度で「日本海ルート」を通じて出羽国秋田城の律令官人や、その勢力下の東北地方土師器文化集団が北海道を訪れ、擦文文化集団と交易を行い、饗宴を催すことがあったと考えられる。そのような交流や物流・交易の過程で秋田（出羽国）産の須恵器や鉄製品などが擦文文化集団にもたらされたとも考えられる。

4　おわりに

東北地方土師器文化集団の北海道への移動・往来にともなう文化接触により続縄文文化が擦文文化に移行していく過程について検討し、擦文文化集団と出羽国秋田城の律令国家集団との物流・交易の実態について考察した。その結果をまとめると次のことが指摘できる。

①北海道では、8世紀を画期として続縄文文化の土壙墓とは特性の異なる末期古墳が築造され、土器型式・組成が東北地方土師器文化と同様のものになる。これらのことは、東北地方土師器文化集団が北海道に移動・往来したことを示すものである。

②8世紀は、北海道在地の文化である続縄文文化と東北地方土師器文化との人的、文化的な接触により、東北地方土師器文化の文化的要素が続縄文文化に受け入れられ、擦文文化が成立していく文化変容の画期である。

③須恵器の物流、多条横走沈線文土器の分布、鉄製品の物流からみると、8世紀後半～9世紀には北海道石狩低地帯の擦文文化集団と、秋田（出羽国）の律令国家集団あるいは、その勢力下の東北地方土師器文化集団との「日本海ルート」による物流・交易が展開していたと考えられる。

④8世紀後半～9世紀の史料には、北海道地域の人びとと、出羽国秋田城の律令国家集団との間で朝貢や饗給にともなう交流や交易が行われていたことを示す記事がみられ、擦文文化集団と秋田（出羽国）の律令国家集団との「日本海ルート」による物流・交易が展開していたことが裏づけられる。

これまで示してきた8～9世紀にみられる東北地方土師器文化集団の北海道への移動・往来と、擦文文化集団と律令国家集団との秋田城を通じた物流・交易の成立は、律令国家の北進政策の強い影響によるものと考えられる。

このことは、7世紀後半の史料である『日本書紀』斉明四年～六年の阿倍比羅夫の遠征記事からも裏づけられる。この史料によると比羅夫は、齶田（秋田）、渟代（能代）などの蝦夷を服属させ饗応して位階を与えるなど、東北地方日本海沿岸地域をある程度勢力下におさめ、渡島（北海道地域）に遠征している。秋田城の設置に先駆け、これらの地域の東北地方土師器文化集団は、律令国家の勢力下にとりこまれていったものと考えられる。しかも、遠征の状況をみると、比羅夫の軍が北海道を含めた北方地域の状況を把握し効率的に遠征が行われ、遠征にあたり北海道地域に東北地方土師器文化集団（陸奥蝦夷）を同行させている記事もみられる。これらのことから、律令国家集団の北海道地域への遠征や、その準備を整えるための先遣隊として東北地方土師器文化集団が北海道地域に派遣された可能性がある。比羅夫は遠征において渡島から、毛皮類を交易品として持ち帰っているが、このような毛皮類を収集し律令国家が交易を円滑に進めるためにも、東北地方土師器文化集団が北海道地域に派遣されていた可能性が高いものと考えられる。比羅夫の遠征以外にも、記録にはのこらない大・小規模の遠征が多数行われていたと考えられ、その遠征にさきがけて東北地方土師器文化集団が北海道に何度も往来していたことが推定できる。

このことから、律令国家の北進政策が8世紀にみられる東北地方土師器文化集団の北海道への移動・往来の一つの要因になったものと考えられ、この時期に「日本海ルート」による物流・交易の基盤が整えられたと考えられる。しかも、この東北地方土師器文化集団の北海道への移動・往来にともなう文化接触により続縄文文化が変容し、擦文文化に移行していくのである。

その後、8世紀後半には秋田城が設置され律令国家の秋田（出羽国）における支配体制が強化される。これにともない、それ以前に整えられた「日本海ルート」を基盤に、律令国家集団あるいは、その勢力下の東北地方土師器文化集団と擦文文化集団による物流・交易のシステムが確立されていくのである。

すなわち、擦文文化は、律令国家の文化的、物流経済的な枠組みの中に取り込まれていく過程で成立し、物流・交易に適応した独自の文化を発展させていくのであり、その物流経済的基盤や文化的要素などからみて、律令国家集団や、その勢力下の東北地方土師器文化集団の強い影響により成立した「北海道型土師器文化」としてとらえられる文化でもある。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、右代啓視氏（北海道博物館）、小口雅史氏（法政大学）、伊藤武士氏（秋田市教育委員会）、高橋学氏（秋田県教育委員会）、八木光則氏（蝦夷研究会）、斉藤淳氏（中泊町博物館）、伊藤博幸氏（岩手大学）、小嶋芳孝氏（金沢学院大学）、宇部則保氏（八戸市教育委員会）、天野哲也氏（北海道大学）に貴重

なご教示・ご意見を賜った。記して感謝の意を表すものである。

なお、この研究は科学研究費助成基金助成金（基盤研究（C)、課題番号25370900、研究代表者:鈴木琢也）「古代日本列島北部地域における文化集団の移動に関する基礎研究」の成果の一部である。また、科学研究費補助金（基盤研究（B)、課題番号23320145、研究代表者:小口雅史）「律令国家の北限支配からみた、津軽海峡を挟む古代北方世界の実態的研究」の一部を使用した。

引用文献

秋田県教育委員会編 2010. 秋田県重要遺跡調査報告書Ⅰ―払田柵跡第139次調査・怒遺跡出土遺物―. 秋田県文化財調査報告書第458集. 秋田県教育委員会.

伊藤武士 1998. 秋田城周辺須恵器窯跡の動向について. 秋田考古学 46: 1–36.

伊藤武士 2006. 秋田城跡 最北の古代城柵. 日本の遺跡12. 同成社.

右代啓視 1991. オホーツク文化の年代学的諸問題. 北海道開拓記念館研究紀要 19: 23–52.

右代啓視 2004. 北海道における防御性集落・環濠集落―北と南からの視点から―. アイヌ文化の成立. pp. 355–372. 北海道出版企画センター.

右代啓視 2005. 北方諸地域における古代・中世の要害遺跡. 北海道開拓記念館研究紀要 33: 31–46.

宇部則保 2007. 東北・北海道における6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係. 古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究. 科学研究費補助金(基盤B・研究代表者:辻秀人)研究成果報告書. pp. 260–303.

(公財)北海道埋蔵文化財センター編. 2015. 根室市トーサムポロ湖周辺竪穴群(1). 北埋調報317. (公財)北海道埋蔵文化財センター.

斉藤　淳 2008. 北奥出土の擦文土器について. 青森県考古学 16: 79–88.

鈴木琢也 2004. 擦文文化期における須恵器の拡散. 北海道開拓記念館研究紀要 32: 21–46.

鈴木琢也 2005. 擦文文化における物流交易の展開とその特性. 北海道開拓記念館研究紀要 33: 5–30.

鈴木琢也 2006a. 古代北海道における物流経済. アイヌ文化と北海道の中世社会. pp. 19–31. 北海道出版企画センター.

鈴木琢也 2006b. 擦文土器からみた北海道と東北地方北部の文化交流. 北方島文化研究 4: 19–42.

鈴木琢也 2006c. 北日本における古代末期の北方交易―北方交易からみた平泉前史―. 歴史評論 678: 60–69.

鈴木琢也 2009. 擦文文化期の物流. 擦文文化における地域間交渉・交易. pp. 41–50. 北海道考古学会.

鈴木琢也 2010. 古代北海道と東北地方の物流. 北方世界の考古学. pp. 101–118. すいれん舎.

鈴木琢也 2011a. 北海道における7～9世紀の土器の特性と器種組成様式. 北海道開拓記念館研究紀要 39: 13–36.

鈴木琢也 2011b. 北日本における古代末期の交易ルート. 古代中世の蝦夷世界. pp. 101–118. 高志書院.

鈴木琢也 2012. 北海道における3～9世紀の土壙墓と末期古墳. 北方島文化研究 10: 1–40.

鈴木琢也 2014a. 擦文文化にシャマニズムを探る. シャマニズムの淵源を探る. pp. 141–174. 弘前学院大学地域総合文化研究所.

鈴木琢也 2014b. 北海道の末期古墳と蕨手刀. 北三陸の蝦夷・蕨手刀. pp. 47–54. 岩手考古学会.

鈴木琢也 2014c. 古代北海道と秋田の交流. 古代秋田に集った人々. pp. 47–54. 第29回国民文化祭秋田市実行委員会・企画委員会.

鈴木琢也 2015. 擦文～アイヌ文化期の物流. 遺跡が語るアイヌ文化の成立. pp. 47–62. 厚真シンポジウム実行委員会.

高橋　学 1998. 再び「口縁部に沈線文をもつ土師器」について―秋田県域での事例―. 秋田考古学 46: 37–49.

東北古代土器研究会編 2008. 東北古代土器集成―須恵器・窯跡編(出羽)―. 研究報告4. 東北古代土器研究会.

八木光則 2010. 古代蝦夷社会の成立. ものが語る歴史21. 同成社.

Akita Fort's Trade and the Process of Formation of the Satsumon Culture

Takuya SUZUKI

When examining the process of the formation of the Satsumon culture, we considered the situation regarding the trade and distribution between Satsumon culture groups and groups governed by the Ritsuryo code, via Akita Fort. The results are as follows.

In Hokkaido, at the beginning of the 8th century, during the transition between both eras, mounded tombs built at the end of the Kofun period were constructed as opposed to the pit burials of the Zoku-Jomon culture, and the shape categories composition became similar to that of the Tohoku region's Haji ware culture. These things indicate that it is possible that groups from the Tohoku Region's Haji ware culture migrated to Hokkaido.

Around the 8th century, human and cultural contact between the Zoku-Jomon culture and Tohoku Haji ware culture resulted in Haji ware cultural elements – such as grave and funeral systems, shape categories composition, living arrangements, etc. – being accepted in to the Zoku-Jomon culture, creating a transition period of cultural transformation that formed the Satsumon culture.

Looking at the movement of Sue ware, distribution of multiple patterned Satsumon earthenware, and movement of iron implements, it is possible that trade developed between groups from the Satsumon culture and groups governed by the Ritsuryo code in Akita (Dewa Province), via the Sea of Japan route from the latter half of the 8th century to the 9th century.

Historical materials from this period indicate that tributes or feasts took place as a result of exchanges or trade between the people of the Hokkaido region and those of groups governed by the Ritsuryo code at Akita Fort in the Dewa Province, providing evidence that groups from the Satsumon culture developed trade and exchanges with groups governed by the Ritsuryo code in Akita (Dewa Province), via the Sea of Japan route.

Takuya SUZUKI : History Studies Group, Research Division, Hokkaido Museum